

街区を構成する ウィーン公共集合住宅（団地）の持続性

KSP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
-Re-DANCHI leaflet-

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』

JANUARY
2013
VOL. 104



図 1.Karl-Marx-Hof（カール・マルクス・ホーフ）／1927-30 中央部の広場の西側から見る。

1. 街区を構成する公共集合住宅

市民の9割が集合住宅に暮らしているというウィーン。中でも特徴的なのは、赤いウィーン（第一次世界大戦後、ハプスブルク家に代わり社会民主党が市政を掌握し、ウィーン市議会ですべて与党となり民主的に統治を行ったが、その1918年から1934年までの同市のニックネーム）と言われた時代に建設された多くの公共住宅（市営住宅）団地である。これらの集合住宅団地は、街の街区、ブロックを構成する形で作られており、その多くは、上部に住宅のある街区沿いの住棟壁が穿たれて門となり、街区の内部は緑地化された中庭で、その多くが幼稚園や共同

の洗濯場などを備えている。1920年代のウィーンにとって、かつての王朝内諸国からウィーンに移住した労働者層に低家賃の公共住宅を提供することが急務で、1923年から34年の間に、6万5千戸の市営住宅が建設された。400を超える建築事務所がその任を担ったとされている。住戸内部やエレベーターの設置等、内部的リニューアルは行われているのだが、その形態は、建設後90年近くが経った現在でも、堂々と街の歴史や景観を担っており、わが国の団地の状況とは相当に異なっている。ファサードの構成も、街とのスケールの連続性や人間スケールの表現など、スケールに対しての配

慮が出来ていると感じられるものも多く、よく1920年代にこれだけのものがつくられたものだと、感心する。

本団地再編プロジェクトでは、昨年度、多くの海外団地再編、再生事例における空間の特徴を調べ、かつ体感してきたが、ほとんどの団地で、街区型、もしくは沿道型への再編、領域性の確保が目標となっていることがわかるとともに、その空間の妥当性についても確認してきた。我が国の公的集合住宅団地は、いわゆる南面並行配置で住棟が配置され、特に、効率的建設・量的生産が大きな目標となった昭和40年代以降の団地では、大規模にそうした配置が



図 2. Karl-Marx-Hof 配置図
ウィーン建築センター (AzW)

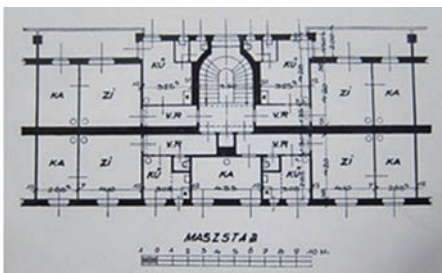


図 3. Karl-Marx-Hof 住戸プラン

実施され、巨大さもあいまって周辺から隔絶した特異な形態を示している。地域再生のための骨格性の確保、少子高齢化の進む中での優しく安全な居住環境の有り様として、そういった沿道性の無さ、領域性の乏しさを、いかにストックを活用しながら解消していくのか、周辺の市街地との連続性、連続感の創出、特に街区単位での沿道性の実現を図っていくのが、団地再編、コミュニティの再生のための大きな空間的目標に



図 4. 足元に穿たれた開口が街を繋ぐ



図 5. 外壁の凹凸が効果的



図 6. 道を跨いだ開口部分

なると想定しており、改めてウィーン街区型団地の実態を体験調査し、報告することにした。ウィーン市内にある 15 余りのそういった団地を見て回った印象は、RE-DANCHI リーフレットの No.09 で紹介している「浜甲子園団地さくら街」の街区型建て替え事例に近い印象で、中庭の豊かな空間性、入居者の視線が意識できる安心感、緑や空と共生している実感など、都市型の、それでいて静かで豊かな屋外空間を備えた構成の良さが確認できた。階数は、6 階～8 階ほどのものが多く、上階はペントハウス型となっていて高さに対する配慮が良くできている。階段室型で、小型のエレベーターが付加された 15 戸程の単位が並んでいるのだが、それでいて単調でもなく、中庭の大きさ、街区の大きさはまちまちであるものの、豊かな空間性に優れたものが多い。ただし、決定的に我が国の集合住宅の住戸プラン構成

と異なるのは、街区の壁状に構成される住棟の長手方向の真ん中に壁があり、住戸は街路側か中庭側かのどちらかにしか面してはいないことである (図 3)。確かに、湿度も低く、冬季の晴天の少なそうなウィーンで、道路側も中庭側もそれなりに豊かなボイド空間に面していることゆえの、日照ではなく採光重視の住戸プラン構成であり、これだけの完璧なまでの街区型が実現できている理由でもある。

2. 近代共同集合住宅

西欧の共同住宅の歴史は長いが、それまでの都市内のアパートは、共同水道、共同トイレであった。赤いウィーン時代に建設された公共住宅には、各戸に水道、トイレがあり、近代アパートの元祖とされている。

この頃、わが国では 1923 年 (大正 12 年) に発生した関東大震災の復興支援のために財団法人同潤会が設立され、同潤会アパートは耐久性を高めるべく鉄筋コンクリート構造で建設され、当時としては先進的な設計や装備がなされていた。振り返ると青山同潤会アパートなど、沿道性を備えたものも多く、その点では近似しているのだが、片や今でも立派に都市の構成要素として住まわれ続けているのに対し、同潤会アパートはそのすべてが現存していない。(なお、RE-DANCHI リーフレット VOL.012 で、同潤会による複合開発と震災復興住宅が紹介されている。)

3. カール・マルクス・ホーフ

赤いウィーン時代を代表する公共住宅、カール・マルクス・ホーフ (Karl-Marx-Hof / 1927-30) は、地下鉄 U 4 の終点、ハイリゲンシュタット駅の前、全長 1km に及ぶ細長く広大な敷地 (図 2) の端から端まで、特に東側の住棟が切れ間なく連続し、下部に、道路や中庭を跨ぐ半円形の開口がリズム良く穿たれて

いる(図1,4-6)。この開口空間は、都市的な気持ちの良いスケールで、一般的な街区型のエントランス開口とは異なるスケールのデザインとなっている。敷地は156,000㎡あり、1,382戸の住戸の他、店舗、食堂、図書館、幼稚園、託児所、郵便局、歯科診療所、薬局といった共用施設がある。

南北の街区は相当に大きく、後述の一般街区型よりは広々とした中庭だが、囲まれ感は悪くない。19世紀末のウィーンゼツェッシオン(ウィーン分離派:過去の様式に捉われない、総合的な芸術運動を目指し、モダンデザインへの道を切り拓いた)の流れの中に位置し、設計は、オットー・ワグナーの弟子のカール・エーンが設計競技により選ばれた。

4. ベーベルホフ

ベーベルホフ Bebel-hof / 1925-26 は、一般的な四角い街区構成だ



図7. 歩道上にせり出した Bebelhof



図8. 端正なデザインの裏通り側



図9. すっきりと気持ち良い中庭



図10. Bebelhof / 1925-26 表通り側



図11. 表通りから中庭への開口

が、大通り・裏通り・表通りと各々ファサードのデザインと機能構成を変えていて素晴らしい。表通りの1階には商業店舗を配し、両端の交差角はセットバックしてスペースをとったうえで店舗にしている。小ぶりの街区エントランスはこの店舗列にある。大通りの歩道上には住宅を張り出し、下部を通り抜けさせている。裏通りは、モダンデザインの気配が美しい工夫された形のテラスバルコニーをバランス良く少なめに配している。街区を単純に囲んだ一つの大きな建物という見方もできるのだが、断面方向の変化、ファサードの分節、高さの変化、ヒューマンスケールへの意識など、退屈さを感じさせない。

5. 連鎖して街をつくる市営住宅

図12は、北から南東へカーブしているトラムの走る道路の右側が



- ① Metzleinstler-Hof 1916, 22-23
- ② Reumann-Hof 1924-26 (1924-25)
- ③ Julius Popp-Hof 1925-26
- ④ Matteotti-Hof 1926-27
- ⑤ Herwegh-Hof 1926-27
- ⑥ Franz-Domes-Hof 1928-29
- ⑦ Haydn-Hof 1928-1929
- ⑧ Leopoldine-Glockel-Hof 1931-32

図12. 連鎖する市営住宅街区

ウィーン5区、左側が12区で、市営住宅のブロックが連鎖して街をつくっていく様が良くわかる。囲み街区といっても、形状は実に多様で、

訪れてとても楽しい。①が、ウィーンで最初に出来た市営住宅、メッツラインスターラーホーフ。カーブした平面配置に呼応して外壁も曲面が用いられていて楽しい。②は、道路側に開いた前庭広場を持っている。④は道路を跨いで左右に街区型が展開し、この街角にバス停がある。③と⑤でまちに開いた広場を囲んでおり、③では、この広場側にエントランスがある。⑦と⑧の開口は向かい合っている。⑧の改修では階段室ごとのコミュニティ単位で色を変えるなどの取り組みも見られた。囲まれた中庭に面して階段室（住戸アクセス）があるので人気（ひとけ）もあ



図 16.Raben-Hof / 1925-28



図 13. ④ Matteotti-Hof 1926-27



図 14.George-Washington-Hof/1927-30



図 15. 北東の部分が G-W-Hof

り、その囲まれ感は気持ち良いものが多い。

街区型が基本ではあるが、都市的なスケールで特徴的なのが、公道をまたぐ開口だ。ジョージ・ワシントン・ホフでは、車と人のそれぞれ2本の開口が特徴的だ。図 13のMatteotti-Hofでも、街区型が連鎖する市街地に特色ある場所をつくり出している。ラベnhofは、正方形のきちんとした街区ではなく、貫通する道路に面して広場があったりする大きな複合的街区だが、この都市的スケールのダイナミックさは気持ちよく、アムステルダムベルラーへの集住街区をもっと都市的にした感じ。大学のキャンパスのような雰囲気もする。よく見るとコミュニティ単位ごとに個別の名前がついて、それぞれにまた小さな街区開口がある。図 17、18のWinarsky-Hofでは、複合してできた街区の複数棟を貫通し、街と連続している。



図 17.Winarsky-Hof / 1924-25

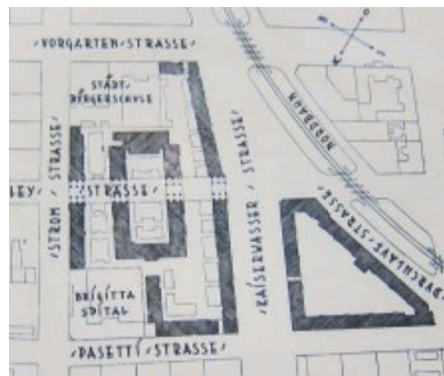


図 18. 右は Otto Haas-Hof / 1924-25

参考資料：

- 1) <http://www.wien.info/ja>
- 2) ウィーン建築センターの展示資料
- 3) Architecture in Vienna 1850-1930 / 2003 Springer Wien New York

『街区を構成するウィーン公共集合住宅（団地）の持続性』

文責：江川直樹（関西大学 教授）
作成協力：保持 尚志（関西大学大学院 博士後期課程）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2013年1月

関西大学
先端科学技術推進機構 地域再生センター
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室
Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)
URL : <http://ksdp.jimbo.com>